

◎「流れる血に、イスラエルもパレスチナもない」少年を殺害されたイスラエル人家族が報復の連鎖を戒める

【The Huffington Post、2014年07月11日】

http://www.huffingtonpost.jp/2014/07/10/families-set-differences-aside-to-grieve-together_n_5576490.html

6月30日、行方不明になっていたユダヤ人の少年3人がイスラエルの占領地ヨルダン川西岸で遺体となって発見された事件と、7月2日に東エルサレムで16歳のパレスチナ人の少年ムハンマド・アブ・クデールさんが誘拐、殺害される事件をきっかけにパレスチナとイスラエルの間で報復攻撃が激化している。

武力、そして報復するという脅迫手段をとる人間もいる一方で、殺害された少年の家族の中には、喪に服しているこの機会に、連帯を示すために集まった人もいた。

7日、エルサレムのニール・バラカット市長は殺害されたナフタリ・フレンケルさんの母、ラケルさんを訪問した。バラカット市長は訪問中、ムハンマドさんの父フセインさんに電話をかけ、フセインさんとナフタリさんの父イシャイさんが話をするように提案し、2人は応じた。

バラカット市長は Facebook に、「息子を失った2つの家族の間に交わされた電話での会話は、感動的で、すばらしいものだった」と綴った。

「私たちは彼らの悲しみに、私たち遺族からも一方の遺族に、深い哀悼の意を表します」イシャイさんは繰り返しこう述べた。「クデールさんたちが真犯人を突き止めたようで何よりです。私たちは今回の出来事を絶対に許すわけにいかない、と表明しました。イシャイさんは私たちを受け入れてくれました。彼が聞き入れてくれることが重要でした」

イスラエル軍とパレスチナの武装勢力との間の緊張が高まるにつれ、イスラエルのベンジヤミン・ネタニヤフ首相はアブ・クデールさんに哀悼の意を表明した。しかし、「テロリストに対しては別だ。我々はテロリスト全員に報復する」とも述べた。

フレンケルさん一家は、ムハンマドさんの殺害を受けて声明を発表した。

「流れる血に、イスラエルもパレスチナありません。人殺しは人殺し。そこに正義はありません。ただ、赦しと贖罪があるのみです」

☆関連するキーワード：イスラエル・パレスチナ紛争、テロリスト、赦し

一神教における戦争と平和（3）

—— まとめ ——

グローバル化と「原理主義」の 動向に対する洞察

グローバル化や近代化の中に潜む「内なる暴力性」を洞察することが必要である。その上で、それぞれの文化、宗教に根ざした**尊厳（誇り）**を回復していくことができるようなプログラムを実施し、市民社会を形成していけば、過激な原理主義的動向を抑止することができるのではないか（→民主化とイスラーム主義、**ポスト世俗主義**）。

耐え難い現実の苦悩と 終末思想との関係

米国は、世界人口の4%を占めるに過ぎないが、総エネルギーの40%を消費している。他方、世界の近代化にともなって生じてきた負の部分は、イスラーム世界に押しつけられてきた。この苦悩の中で正義を求めようとするとき、強力な**終末思想**（殉教、来世待望）が呼び起こされることになる。そこでは殉教（殉国）が美化される。このような構造的な問題（**構造的暴力**）に対する取り組みを怠ることはできない。

他者の苦難に対する感受性

- **正義**や**人道的介入**という大義名分によって、暴力（戦闘行為）を正当化することは、しばしば**他者の苦難に対する無関心**を引き起こす。
- 日本の平和主義は、他者の苦難に対する感受性を持ち得ているかどうかを絶えず吟味する必要がある。

異質なもののとの向き合い方

- 歴史的には、異質なもの（マイノリティ）に対しては、「**同化**」や「**排除**」という態度が取られることが圧倒的に多かった。同化や排除とは異なる共生および社会統合のモデルを構築する必要がある。
- 欧米の近代的な価値観に準拠するイスラームのみを肯定的に受けとめようすると、結果的にイスラームの実像（全体像）を見失うことになる。

他者理解と自己理解の相互関係

- 他者の宗教的**アイデンティティ**を尊重するだけでなく、自己の**宗教的アイデンティティ**を的確に説明することが求められる。
- 国内においては、一神教と多神教の二元論的対比のもとに多神教を称揚し、一神教を批判する傾向が近年見受けられるが（→**リバース・オリエンタリズム**、**オクシデンタリズム**）、そうした傾向が生み出されてきた歴史的経緯を批判的に考察すると同時に、安直な二分法に陥らない代案を提示していかなければならない（→**見えざる偶像崇拜**、**構造的暴力**）。

宗教間対話・教育の必要性

- キリスト教主導の宗教間対話：世界教会協議会（WCC）など
- イスラーム主導の宗教間対話（小杉泰『9・11以降のイスラーム政治』参照）
- アンマン・メッセージ（ヨルダン、2004年）：穏健派の立場から
- 宗教間・文化間対話のためのアブドゥラー国王国際センター（KAICIID, 2011年）
- 一神教学際研究センター（CISMOR）の取り組み
- 京都・宗教系大学院連合（K-GURS）の取り組み